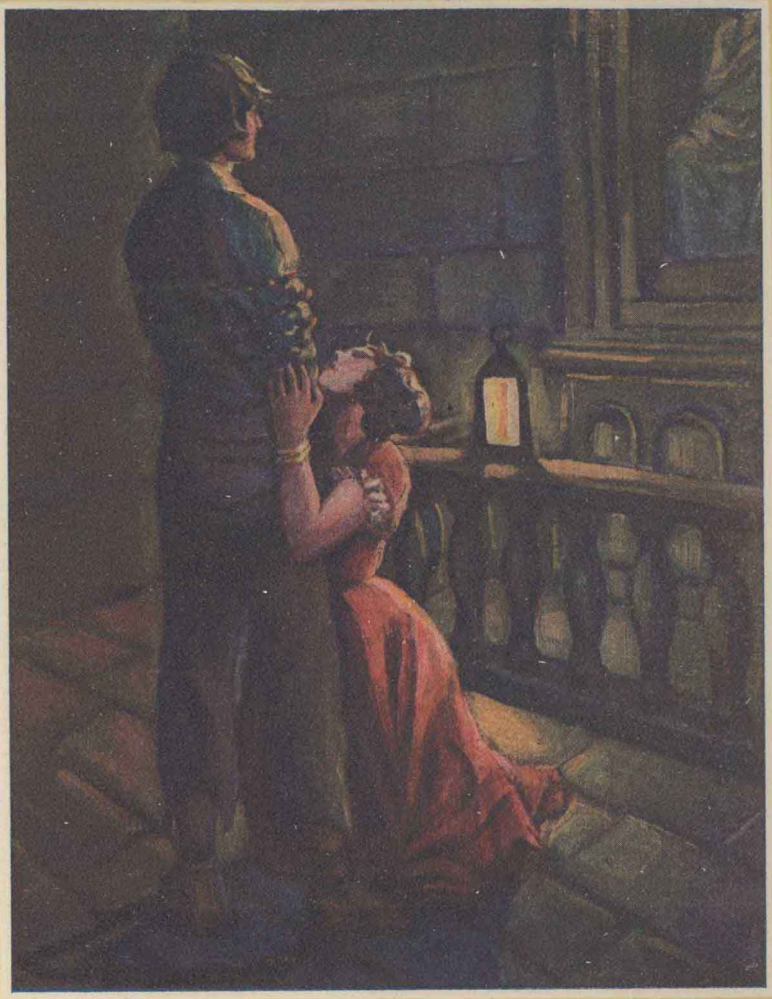
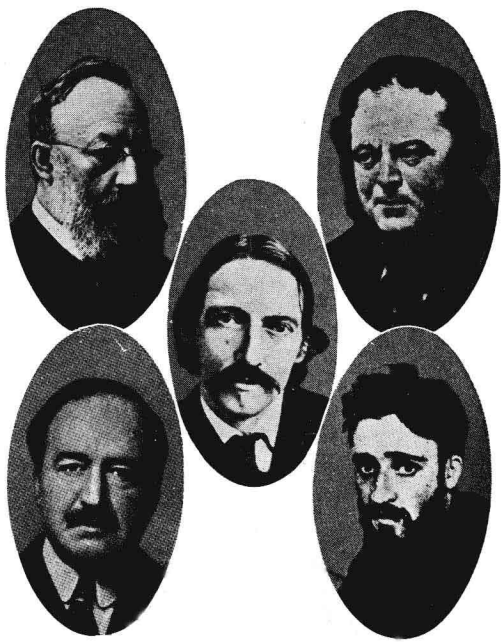


# MODERN SHORT STORIES OF THE WORLD

# 近代短篇小說集



ルレルケ　スエニバイ　ンスンヴィテス　ルーダンタス　ンシルガ

肖像は各篇の首位の作家一人づゝを掲げることゝした

新潮社出版

非賣品

世界文學全集(26)
近代短篇小說集
第二十九回配本

昭和四年七月十五日印刷
昭和四年七月廿五日發行

發行者 佐藤義亮

東京市牛込區矢來町
發行所 新潮社

電話牛込 (代表)八八〇〇番 八八〇〇番 八八〇〇番 八八〇〇番 八八〇〇番
振替東京 二三、四五〇番

東京市小石川區久堅町 共同印刷株式會社印刷

# 解說

## 佛蘭西篇

スタンダールからカルコへ、その間にまさしく一世紀の歲月は流れてゐる。そして、スタンダール、メリメ、コッペ、リイル・アダン、ロティまでを極めて大まかに、浪漫派の人々と假定し、モウパッサンとルナアルとを自然派と見て、フィリップ、アポリネル、カルコをそれ以後の新傾向をそれ〴〵代表するものと考ふる時は、レニエは象徵派の正系を承けついで、やがて散文物語作家として開展したる人であり、以上で佛蘭西の短篇物語の最近一世紀間のあらゆる方向をほゞ盡くしてゐるといつてもまづ差し支へはなからう。

スタンダール（千七百八十三年——千八百四十二年）がその情熱の力强さ、凡俗な平調なものを厭うて、英雄的に突進する勢は、一方に併し的確な觀察と解剖とが伴ふが故に、そこへ明瞭な人間性の典型を描き出し、彫み出さずには置かないのである。自己崇拜にまで昂げられた個人主義、これは後のモオリス・バレスに現はるゝ如き抒情的なものでなくて、悲喜劇的な强い現實性を帶んで人に迫るのである。浪漫派の中でも或る意味で、最もロマンティクでありながら、その的確さに於ては最も現實的な作家はスタンダールである。奔放で、けたのはづれてゐる點では凡俗を絕した英雄兒である。その情熱が然し情熱一方にはしらずして、好奇探究に向けられて行く。自己の內に、自己の周圍に、自己の時代に通ずる現象の因果を飽まで突きとめ解剖し表出せずにはゐられない力となつて展開する。最も情熱的であつて最も冷靜である。併しその事自體が既に最もロマンティクであるとは言へる。

メリメ（千八百三年——千八百七十年）の情熱は沈潛的である。寧ろ寂光だ、或は冷光である。彼が歷史物語を書く

場合には、例へば『マテオ・ファルコーネ』の如き、忠實な細心な文獻の涉獵者であり、現代物語を書くに當つては、例へば『カルメン』や『コロンバ』の如き、實際の經驗を整理し選擇し調節し、單純化と統一化とを目標とする。從つて作品全體の運行が迅速であり快速である。いかに熾烈な本能的な情熱を取扱つても、メリメの作品に於ては、それが全體の節調の中に適當に押へられ繫がれてゐる。古典悲劇の中の情熱を見るが如きである。情熱が燃え立つて、それを理智が解剖するのではない。情熱と理智とがいつも同時に、同程度に伴隨し伸展する。明るくて一種の悲哀が漂ふ。彼の異國情緒がそれであり、彼の文調そのものがそれである。

コッペ（千八百四十二年——千九百八年）、巴里つ兒で、病氣勝ちで、從つてどんな美しい景色よりもこの大都會が好きで、殆どそれから出たこともなく、別の役人の仕事をしてゐながら詩人であり、氣のきいた散文物語の作家であり、先人としてはミュッセの系統を引いて居り、同時代の先輩としては高踏派のルコント・ドゥ・リイルの許に集る一人であり、然かもパルナシアンの詩とは全く異つて、素直ななだらかな、詩が散文的であり、散文が詩的であり、それだけ當代で何人にも最も愛好せられた人であり人氣は第一であつた。柔しい氣のきいた敏感なつゝましやかな愛嬌のある人、それがフランソワ・コッペである。

リイルアダン（千八百四十年——千八百八十九年）、浪漫文藝と象徵文藝との共通點は、解放の要求にある。但し一つは主情的で他は全的である。併し平凡習俗の生活を厭ふ點も共通でありながら、一つは遁避的であり他は爭鬪的である。リイルアダンは浪漫的と見るよりはより多く象徵文藝的である。素晴しい夢から醒めて、實際は橋の下に眠る生活、ふぬけの舊慣的正規の生活をするより慘ましいと凡俗は見ようが、自己の自由な生活を送る事を求める。しかも彼は自分の藝術をもつて、歐羅巴全都市の破壞の武器たらしめようとさへする。若しルスィフェルが浪漫派詩人等の共通性になつてゐるならば、彼こそは最も熾烈な齒をむき出してゐる墮天使である。恐らく天才といふ辭は、この人にこそ用ひらるべきであらう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

ロティ（千八百五十年――千九百二十三年）にとつては、海洋は一種の鄉土愁をもつてゐる。異國情緒といふだけでは不足である。いはゞ靈魂の住家を世界をめぐつて探ね歩いてゐるやうである。彼の生活は海洋となつて世界へ流れめぐつてゐるやうであり、自然の元素は、動物にでも、草木にでも、過去にも世外にも、夢にも現實にも共通な呼吸をもつて、ピエル・ロティなる一人の人間を敏感に造りいだしてゐるといふ感じがさせらるゝ。

モウパッサン（千八百五十年――千八百九十三年）、極めて鋭い感受性、鋭利な解剖、的確な再現力。彼は文藝家の持つ二重人格を最も完全に具現してゐた人である。彼の前には恐らく何人も祕密を藏し得なかつたであらう。但しその二重の人格が相鬩ぎ合ふやうになつて來ると、作家その人は極めて恐ろしい悲慘な最後に到達せずにはゐられない。

ルナアル（千八百六十四年――千九百十年）、細やかな心理解剖、その心理の動く空氣をも共に併せて如實に微妙に的確に浮ばせるルナアルの藝術はまさしく「自然主義の古典」である。素樸で淳眞で、端的で同時に想像的で、『博物誌抄』の如きはまさに自然の單純さと想像の飾裝との根元的一致を見するものである。

フィリップ（千八百七十四年――千九百九年）、造られた若しくは造り出した文藝家ではなく、全く生れ出た文藝家である。貧困者の心理は、田舍の小さな町の住民の生活は、フィリップその人の全身を通じて物を言はさずには置かないのである。イイル・ドゥ・フランスの野に咲く一莖の花草、併し同時に全佛蘭西の野を蔽ふ花の先づ咲き出でた姿である。

アポリネエル（千八百八十年――千九百十八年）「超現實主義」の論議がいかに盛んになされても、その出發は當然この人に置かれねばならぬ。伊太利に於ては「未來派」が、獨逸に於ては「表現派」が、そして佛蘭西に於てはキュビスムが大戰前後の動亂の心理狀態を直接表現せんと望みはするが、いかに動亂を起さうと、アポリネエルを通じて現はさるゝ佛蘭西の動亂そのものゝ表現は、やはり大海に起る動波の如く、奥深い、ゆるぎなき根柢を持つた、安心の出來る動波である。

レニエ（千八百六十四年――）、詩人レニエは象徴派の正系を傳へ、後年は平明な詩體に轉じ、やがて批評に散文物

語に無數の作品を刊行してゐる。歴史物語に、現實心理解剖に、上品な、匂ほはしい、微妙な、優美な、ゆつたりした、いかにも藝術品らしい藝術を思はせる現存の大家である。

カルコ（千八百八十六年――）、彼もまた現代の動波の間から浮び出る一人の魂である。少年時から見馴れた徒刑囚、大戰前のモンマルトルの放浪から學び得たアパッシュの生活、アルゴを交へた强壯な彼の文體は、これ等どん底生活者等をして物を言はしむるには何よりも適したものであり、動亂に卷かれて底深く置かれたものが表面へ浮び出る姿である。（吉江喬松）

# 英米篇

この英米篇には代表的英國作家五人と、米國作家三人との世界的代表の短篇小説が收められてゐる。

ロバート・ルイズ・バルフォア・スティヴンスン（一八五〇年――九四年）はスコットランドのエディンバラに生れ、其處の大學にも學んだが、後文學の方面に彼の使命を發見した。全體の傾向は浪漫主義的であるが、非常に多方面の作家で、短篇小説では、ハーディ、メリデス、キップリングなどゝ並んでその確立者と見做されてゐる。彼は機械と刹那主義との現代に浪漫趣味と悠久との門を開き、言葉と繪畫との魔力を眞に生かした作家である。『新アラビア夜話』なる短篇物語にはその特色がよく現はれてゐる。『マークハイム』は心理と浪漫趣味と魔力との不思議な融合である。近代生活とロマンスとの結合、そこに彼の特異な藝術的使命がある。

ジョオヂ・ギッシング（一八五七年――一九〇三年）は、英國ウェークフィールドに生れ、マンチェスタア大學オーウェン・カレッヂに學んで、學者たらんことを望んでゐたが、或る女との不幸な關係から、遂に學なかばで、亞米利加をふり出しに大陸の各地に流浪の生活を送り、後歸英して、創作界にのぞむに至つた。長篇小説『黎明の勞働者』『デーモス』、

『ザ・ニュー・グラブ・ストリート』等、多くの人生の悲慘な暗い方面を寫實的な筆致で同情深く描いた作がある。『蜘蛛の巣の家』は彼の短篇集として世界的に廣く讀まれてゐる。『草堂の夏』亦絕品たるを失はない。

エチ・ジィ・ウェルズ（一八六六年――）は倫敦郊外のブロムリイに生れ、青年時代には科學の研究に沒頭したことがある。後、新聞界に轉じ、評論に、隨筆に縱橫無盡の筆をふるひ、更に科學小說、寫實小說、社會小說等多くの著作を發表し、現時に於いて、英國文壇に於ける最も人氣ある作者の一人である。彼は飽くまでジャーナリストを以て任じ、小說の如きも、自己の社會思想の宣傳具であると公言してゐる位である。彼の短篇小說は『盲人國』にほゞ收めてあるが、最近、『短篇選集』が出た。短篇として優れたものは、輕快なユーモラスな寫實的及び浪漫的要素を共に具へた種類のものである。

キャサリン・マンスフィイルド（一八八九年――一九二三年）は、現在少壯批評家として活躍してゐるジョン・ミッドルトン・マリイの妻であつた。早くから露西亞のチェホフの影響を受けて、英國短篇小說界に、新鮮な空氣を送り込んだ。女史の著作は悉く短篇小說で、そのうちでも長いものより短い作品に非常に優れたものが多い。短篇集には『幸福』、『園遊會』『人形の家』等がある。女史の作には英國風の鈍重なところは少しもなく、飽くまでも輕快で、しかも時にユーモア、時にペーソス（哀感）が實に巧みに表現されてゐる。女史は文字通りに英國のチェホフである。

マンスフィイルドを巧みに露西亞風の短篇の特色、特にチェホフのそれをとり入れた作家とすれば、オルダス・ハックスリ（一八九四年――）は佛蘭西現代の短篇の傾向を攝取した所謂モーダニズム（現代主義）の最尖端を走つてゐる作家である。而も單にモーダニズムのみならず、社會的要素もかなりに混つてゐる點は、まさに最新現代主義の作家と呼ばれてもよい。オックスフォード大學出のまだ新進作家ではあるが、長篇小說『わくらば』（一九二五年）あたりから、めき〳〵と腕をあげて來た。又短篇集には『リンボー』（一九二〇年）、『モータル・コイルズ』（一九二二年）等がある。因みに彼は有名な博物學者トーマス・ハックスリの孫である。

以上が英國の作家である。次には亞米利加の短篇小説であるが、その代表的作家は言ふまでもなくポーとオウ・ヘンリに指を屈しなければならぬ。ポーは既に本全集の他篇に收められてゐるから、こゝではオウ・ヘンリを第一にかゝげることにした。

オー・ヘンリ、本名ウィリアム・シドニイ・ポータア（一八六二年――一九一〇年）は新聞記者をやつたこともあるが、純然たる短篇小説作家で、十二卷の短篇集がある。その作風は輕妙洒脫、彼の短篇小説を組合せると、物質文明の亞米利加生活の美しい寄木細工が出來るであらう。

ジャック・ロンドン（一八七六年――一九一六年）は短篇作家としてよりも、『野性の呼聲』『海の狼』等の長篇作家としてよく知られてゐるが、『南海物語』に收められてゐる短篇の作者としても、世界の文藝壇に獨特の地歩を占めてゐる。オウ・ヘンリが近代亞米利加主義の都會文化の代表者であるとすれば、ロンドンは都會文化の侵入によつて次第にちゞこまつて行く田園山野の姿、若しくは都會文化に反抗する自然の威力とでもいふべきものを力强く表現した作家である。それ故にこそ、彼の作品からは野性のものゝ力强さが感ぜられるのであらう。

シャーウッド・アンダスン（一八七六年――）はオハイオ州に生れ、十六七歳の頃シカゴに出て、四五年間勞働者として働いた。西米戰爭に參加したこともあり、後には又廣告業に從事したこともあつたが、一九二一年、將來ある作家の活動を促進する意味のダイアル誌賞を受けて、作家生活に入る端を開いた。彼も長篇に優れてゐるが、『オハイオ州ワインスバーグ』（一九一九年）、『卵の勝利』（一九二一年）等の諸短篇は獨特の風趣を具へてゐる。特に短篇小説は、詩的表現の華かさが目立つてゐる。彼は新進ではないが現代の最尖端を走る作家の一人である。本篇は比較的數に於いては尠いが、英米の近代、現代の短篇を味ふには、好個の選集であらうことを、一言する。（宮島新三郎）

# 獨逸篇

獨逸には論文のがつちりしていゝのがあつても、聳拔で氣のきいた隨筆の類は少ない。それと同じに、長篇小說では本格的で、興味よりも問題の把握を意圖したいゝ物が澤山あるのに、あつさりと手際よく纏まつた小品的な短篇は、無いことはないが、探すのに一寸骨の折れるほど、少ない。併し短篇流行の現代世界的大勢に動かされてか、近頃になつて短篇文學勃興の機運頓に湧き出すのが見える。雜誌なども、盛んに懸賞募集をやりだした。

近代獨逸文學に於て、小說もやはり、戲曲や詩と步調を同じくして、變遷を經て來てゐる。十九世紀の第一の三十年間に浪漫派が仆れ、佛蘭西から波及した政治思想の大變動に刺激された傾向的ジャーナリズム文學が生れた。ハイネの諷刺的な隨筆は、この期文學の恐らく最大の收穫であらう。人々は現實の生活に眼を向けた。併し古典派以來の、さうして獨逸人特有の理想性と空想性は、全然現實に則することをなか〳〵容易には許さない。そこで、詩的といふ形容詞の附いた現實主義が出現した。現實の生活から材料を攝る。併し文學が詩である限り、無條件に現實に沒入することはあり得べきでない。現實的材料のうちから、その美しい物のみを選んで表現せねばならんといふのである。これが十九世紀中葉に於ける獨逸文學の本流をなしてゐる。ケルレルもハイゼも、これに入る。この二人にテオドル・シトルムを加へて、十九世紀中葉獨逸小說の三星と呼び慣らす。

ケルレルは瑞西人。一八一九年チュリヒに生る。家は豐かでなく、早く父を失つた。風景畫家にならうとして、獨逸へ來て、ミュンヘンの美術學校へ入つた。困窮のどん底、一番大切にしてゐた最後の所持品、愛用の笛までも賣拂つた。旗竿のペンキ塗りもした。殆ど十年餘り、丹青の途を步いたが、終ひにものにならず。長篇小說『綠衣のハインリヒ』はこの生活記錄。諸方流浪の果、故鄕の町へ歸る。創作に精進、一八九〇年死す。ケルレルの作家的性格はど

うも二重的だ。ひどく空想的であると同時にひどく現實的である。新鮮で素樸で自然人的でユモラスな點は、瑞西人の血があるからであらう。併しまた、獨逸的な作家だ。ゲルマン的な浪漫趣味が濃い。珍奇、怪異、奇蹟といふやうなものを好むが、生れと時代的生活とに强く影響された現實的克明もある。浪漫的現實主義者だ。瑞西のゲエテ、小說界のシェクスピアなどゝ呼ばれ、小說界一方の雄である。詩と戲曲も作つてゐるが、その價小說には及ばない。性格描寫に腕の冴えがある。但し若干教訓的臭味がなくもない。瑞西作家の多くにある弊だ。その作品が美しい形式の纏りを持つ點では、ハイゼと相通じてゐる。

ハイゼは十九世紀後半の作家中、最も洗練された圓熟した形式創作の作家である。彼に有名な短篇小說論がある。鷹の論（ファルケンテオリー）といふ。ボッカチオの或る短篇小說に、一人の騎士が美女に言ひ寄る。その戀容れられず、騎士は一切の財產を費ひ果し、今は一羽の鷹を持つのみ。或る日かの美女、うらぶれたる騎士の館を訪ねる。もてなすべき何物もない。騎士は終ひにかの愛鷹を料理して、彼女を饗した。それが彼女を感動さした。そして永年の思ひこの一夕に晴らすことができた、といふ話がある。ハイゼによると、短篇には必ずかゝる鷹が必要だ。運命が一轉するかゝる動機が必要である。短篇は鋭い輪廓の事件一つを料理するもので、他にも種々の條件はあるが、その料理に於て最も重要なるは、かゝる運命の轉換であつて、卽ちかの鷹が後半に至つて現はれねばならない。――かういふ論を說く作家の作品には、果して少し窮屈なところがある。併し順序よく、纏つてゐる。その點で彼は自然主義者などから、甘つたるい滑らかさ、不自然、寢椅子の上ででつちあげた技巧の作家と惡口をされた。彼はミュンヘンで丁度放浪時代のイプセンと知己になつた。イプセンの初期浪漫的な作品は彼の氣に適つたが、『幽靈』が出てからは、二人は分裂してしまつた。ケルレルとは比較にならぬ程樂な生ひ立ちの人だつた。一八三〇年伯林に生る。金持ちの大學助教授の子。ケルレルが美術で養はれたのと對照して、彼は小さい時から音樂の雰圍氣の中で育つた。メンデルスゾーン一家とは親類だつた。青年の時伊太利へ旅行、その土產の一つが、『ララビアタ』。一九一〇年にノベル文藝賞金を貰つた。獨逸文

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

學者では彼がその第一回受賞者である。四年後、八十四歳で死す。

ハイゼを形式主義者として罵つた自然主義も、一九〇〇年頃には沈默してしまつた。時代は變つて來た。新しい人がどん〳〵出て來る。ワッセルマンの自叙傳スケッチの中に、「私の一九〇〇年までの生活は、餘りに冒險的で、餘りに非良民的で、とても何かその報告を書く氣はしない」とある。この少しは自然主義的色彩を持つてゐる作家は、一八九七年に『ツィルンドルフのユダア人』を處女作として世に出たが、生れは七三年、南獨のフュルト。作家としては割合に地味な道を歩いてゐる。永く墺太利のキーンに住んでゐるせゐか、健實で寫實的な作風のなかに、一脈キーン的の軟かさとエロティクを加味してゐる。――そのキーン文學の重鎭シュニッツレルのことは、十分日本に知られてゐる。この二人は南方的であるが、それに對して北方的なるは、ショルツとマンである。ショルツは一八七四年伯林に、プロシア國務大臣の子として生れた。軍人生活を捨てゝ、文學に移つた。所謂新古典派の代表者であつて、創作もするし、論文も書く。戯曲が最も得意だらう。自作の人物に扮して舞臺に立つ茶氣(?)もあるかと思ふと、プロシア文藝學院の委員長になつて事務も執る。北方的な幽玄から一轉して、精靈交感問題にも強い興味を持つてゐて、それを題材にして小説も書く。例へば『肖像』など。――マンはショルツに一年後れて、リュベックの大商人の子として生誕。一九〇一年に長篇小説『ブッデンブローク一家』を發表して文名を成して以來、今では戯曲のハウプトマンと比肩して獨逸小説界を背負つてゐる人氣作家である。ハウプトマンにも兄カールがあつたと同じに、マンにも同じ小説家たるハインリヒがあつて、一部の讀者は、カールを推賞すると同じにハインリヒを愛してゐるやうだ。マンの傾向は一言で言へば、現實主義。――シュミットボンはその名の依つて生じてゐるボンの生れ。一八七六年。漸やく五十の誕生を越したばかりで、一昨年かに長逝したのは惜しい。ショルツ、マンに較べて、リソシズムの味と潤ひを豐かに持つてゐる。近代的でゐて、それで中世的な憧憬もその胸に巢喰うてゐる詩人だ。感情の力の強い割りに、構成的な意志が弱いかして、いゝ作品を書くが、擊つ力が乏しい。戯曲に於てそれが殊に感じられる。

現代生活はテムポが早い。神經は過敏な癖に、變つた物にでなければ、なか〳〵働らきかけない。そこで、探偵物が出る。グロテスクが出る。レギウが出る。異國趣味が出る。――エーウェルスは獨逸のホフマン、亞米利加のアラン・ポオ、佛蘭西のボードレールを師とした現代獨逸小說界の變り種である。彼にも主張はある。現代の小說は要するに材料に於て行き詰つてゐるのだ。千篇一律の題材を捉へて、たゞ樣式で幾分かの新しさを工夫するに止まつてゐる。そんな苦勞よりは、進んで斬新な題材を探すがいゝ、といふのである。彼は隨分廣く旅行をした。そして遠隔の變り種の材料を仕込んで、小說を書いてゐる。この點では、クラブントも頗る相似てゐる。彼は支那に暫らく居たことがある。支那物を可なり材料に使つてゐる。李白の詩も飜譯してゐる。日本の寺小屋を脚色して、戲曲を作つた。惜しい哉、天この才人に齡を假さず、昨年死んだ。一八九一年の生れ。クラブントは雅號で、本名は、アルフレット・ヘンシュケ。（新關良三）

## 露西亞篇

由來露西亞文學は長篇を特色とする。十九世紀の偉大なる露西亞文學の名篇傑作に數へらるゝものは凡て是れ、はてしない森林と曠野と廣大な地主邸との產物たる長篇である。露西亞文學に短篇の發達したのは、農奴解放（一八六一年）の結果、都會文明が漸次擡頭して、經濟上及び社會上に大變動を來した十九世紀の末からである。即ち近代都會の慌だしい動搖と刺戟、刹那々々の新しい感覺と印象、刻々に移り變るイリュジョンの流れ――斯うした都會生活の刺戟が近代文學に影響したことは著しい事實で、單に文學の內容ばかりでなく形式にも影響して、所謂都會印象主義といふ特殊の作風を生み出し、その結果短篇の異常なる發達を見るに至つたのである。殊にチェーホフが短篇の形式に最後の完成を與へてからは、凡ての作家が競うてこの形式の上に妙技を揮ふに至つたが、是より前、ガルシンとコロレン

コとは既に多くの短篇小説に優れた技術を見せてゐる。

この二人は一八七〇年代の民情主義乃至人道主義的傾向を代表する作家で、自己犠牲と社會奉仕とがその特色である。ガルシンの女性的憂鬱的作品には、自己犠牲の觀念と共にこの時代の消極的特徴ともいふべき精神的分裂が最も鮮かに表現されてゐる。彼の作品を通じて流るゝ一抹の懐疑的メランコリイは、この分裂から來る時代精神の惱みであつた。『信號』は現實に虐げられた人々の歌ひ手としての作者の傾向を伺ふのに十分であらう。

コロレンコは七〇年代の思潮に屬すると共に、八〇年代前半期の主觀主義的思潮をも多分に加味した民情派の最も優れた代表作家の一人である。本來經濟學者でありながら、主として國民生活の理想的方面を解剖してゐる彼の作品には、他の何人にも增して人道的感情が最も濃厚に現れてゐる。如何なる場合に於ても彼は常に人間性の貴い美しい現れを見出さうとして止まない。特に抒情味の優れた『復活祭の前夜』と『鐘撞きの老人』の二篇はこの老大家のデリケートな人格を偲ぶにふさはしい好個の記念である。

クープリンは實生活の詩人である。革命直前の露西亞生活はそのあらゆる內容と共に凡て彼の創作的視野の中に取り入れられてゐる。然し彼は實生活の委曲を忠實に觀察しながら、心ではそれを憎んでゐる。彼の作品の多數は罪の調書のやうなものである。自分が好んで觀察してゐる生活を裁判するのは、彼が作家としての態度である。現實生活に對する彼の深刻なる諷刺や皮肉はさういふところに根ざしてゐる。この關係に於て『幻覺』は作者の人生觀照の態度を伺ふのに適當な短篇である。

ソログーブは露西亞象徴派の中でも最も異色ある作家で、その特質は、死を讃美することによつて生の苦痛を脱れようとするところにある。彼の考へに據れば、生活は既にそれが生活であるといふだけでも虛僞である。たゞ死のみが唯一の眞實であり、生の標的であり、唯一の救ひである。だから彼の作に於ては死は常に魅惑的に描かれてゐるが、生は何時も暗黑と悲痛と凄慘な事象とに蔽はれてゐる。生に對する斯かる極度の絶望と苦悶とが ソログーブをして

新しい傳説とお伽噺とを創造せしめたのである。『白い母』はその一例であるが、概して彼の創作はその題材からして半ば現實的、半ば幻想的で、事實と想像とが互に錯綜して、少年時代若しくはお伽噺の世界を髣髴せしめる。

ブーニンは氣分と象徴とを重んずる都會詩人の間にあつて唯一の田園詩人である。叙景詩人としての彼の特色は、人を魅するやうなその模し難い情味ある自然の再現力に在る。露西亞の自然はその暗い北國的の色彩、魅力と共に殆んど彼の作に描き盡されてゐる。『秋』と『新らしき路』とは何れも高雅な眞珠の如き名篇で、客觀的の美と作者の主觀的情調とがこれほどぴつたり調和した作品は滅多に無い。

ブーニンの短篇に一段の抒情味を加へたものがザイツェフの『靜かな曙』である。この作では人間の孤獨の淋しみから來る退屈がしみ〴〵と感じられる。けれども彼の作には個性の感じが殆んど無い。凡ての物がその個性を沒して官能的に渾然と融合してゐる。そこにザイツェフの象徴的作風が起る。そこでは際立つた鋭い色彩が皆軟かい水彩畫の色調にぼかされてゐる。油繪のやうな强い刺戟が無い代りに、夢のやうな淡いメランコリイと、しつとりとした軟かい靜かな空氣とが作全體に水晶の如き優雅な氣品を與へる。

ピリニャーク以下三人はソヴェート時代の作家で、三人共革命同伴者側に屬する。ピリニャークは頭から足の爪先まで新時代の精神と動亂とに貫かれた作家で、その作品には革命後の新しい殘忍な矛盾に充ちた、時としては畸形的生活を描いたものが多い。彼の取扱ふ人物も原始的動物と殆んど變りが無い。彼の藝術の特異性は、その題材に新しい形式を求めて、繪畫と言葉の建築の上に同時に働いてゐる點にある。殊にその構成的技倆には獨自的なものがある。從つて彼の作品に於ては、言葉の構成が常軌を逸し、場面の轉換が人の意表に出てゐる。『古いチーズ』にも斯うした手法上の特質がよく伺はれる。

イワーノフはヤーコヴレフと共に「セラピオン兄弟」に籍を有する作家で、「新しきゴーリキイ」と呼ばれた程ゴーリキイのスタイルを帶びた自然主義的作家である。本來シベリヤの密林と、東方に於ける國内戰の血みどろな惡夢と

から不意に頭角を現した作家だけに、作の內容から言へば現代作家中最も殘忍である。事實彼の作品には死體の惡臭が漲つてゐる。革命と國內戰との惡夢、その殘忍さと無意義さ――これが彼の凡ての創作の主題である。『餓鬼』にはさういふ點が最も力强く表現されてゐる。

ヤーコヴレフはピリニャークやイワーノフと同じく革命時の露西亞生活の鮮かな描寫を見せてゐるが、是等兩者に比べると、ヤーコヴレフは『貧しき人々』にも見られる如く民情派的色彩が稍々濃厚であるやうに思はれる。（昇曙夢）

## 南・北歐篇

アレキサンダア・キイランドの名は、『二國物語』の深い印象を想ひ起させる。親友の前田晁君が、キイランドが好きで、たしかこの短篇集を飜譯した筈だ。自分は、キイランドを評して、いつかかう言つた。彼は佛蘭西文學に偏向を持つたためもあらう。彼の氣稟には、北歐人らしい重苦しい陰鬱が割合薄く翳つただけで、これと同量に、典雅な機智があり、微風のやうな輕快さがある。調子のよい諷刺がある。明敏で、透明で、爽やかな文體があり、輝かしい感受性が、ぴち〳〵して居る云々。その新技巧派の使徒さへも、『勞働者の群』その他では、社會暴露をしたゝかにやつてのけた。時代であらう。ブランデスが、「グラス瓶から注ぎ出される三鞭酒の第一杯」だといつた批判は、キイランドの作物の全體性をいしくも、適確に摘出した批判であらうし、門閥の出と、教養とが、彼の端嚴な、すつきりした文體を自然に編み出してくれたのだ。吉江君が譯筆を取るのだから、これほど適人はない。

「わが一生は幸福で多事であつた。云はゞ可愛らしい御伽噺の人生であつた」と、自叙傳で書いたデンマルクの御伽作家、アンデルセンの『風物語』や、『マッチ娘』やが、われ等の少年頃の純情に吹き込んだ藝術味を、誰が忘れることが出來よう。多くを言はずともよろしい。

北國から、惶しく南國へ。

イベリヤ半島の北のイスパニヤ。數年前に、佛蘭西で客死したブラスコ・イバニエスがこゝに生れた。彼の長篇は、むさぼるやうに大抵讀んだ。本國文壇の彼は、宣傳主義の小說家だとか、ジャアナリスチックだとか、世間的名聲と反對に、あまり重きを置かれてゐないらしいが、時代の批判者としての彼については、私には違つた主張がある。が、それは別問題。彼の數十の短篇は、長篇ほどには買へないが、時代の題材を摘み出す尖鋭さには、明らかにモダアニチイがあり、情熱の燃え上りと、構圖の巧みでは、バルザックを、もつと現代にした短篇小說家として、馬鹿に出來ない特殊なものを持つ。

バローハにも、長篇作家としての、スケイルの大きさを認める。彼の傾向には、いろんな因子が混入してゐるらしいが、イバニエスが遠心的であるに對して求心的であり、そこが、イバニエスに比べて、藝術的の香りが高いと云はれるわけであらう。だから、恐らく短篇小說でも、餘技と一口にけなされぬ精緻さは、當然豫感されてよい。

ウナムーノになると、これは人間活動のスケイルがずつと大きくなる。自分はむしろ、伊太利の哲學者クロオチェが、ムッソリニの暴壓主義に反抗して、御機嫌を損ねた少し前に、一面の哲學者であるウナムーノが、スペイン政府の政策を攻擊して、一時、國外に放逐されたといふ共通の挿話を興味多く感じた。新居君が、ひどくウナムーノを推稱して居る。アナアキストとしてのウナムーノであらうが、批評家としての彼、作家としての彼、人生哲學者としての彼を、『霧』『サアヴンテス』其他二三の短篇小說や論文を讀んだだけで、私程度の人間が論ずるのは僭越だ。たゞスペイン第一流の文學者として、世界的に推しも推されもせぬ彼である事だけは、私にもわかる程度。

アソリンの筆名であるヨセ・マルチネス・ルイスの作物として、自分の讀んだのは、『ドン・ファン』である。この著述によつて、スペインのアナトオル・フランスと云はれたといふこの著述の眞價も、自分には正直なところ、半分しきや解らない。といふよりも、その他の制作を讀まぬと、アソリンの全體が解らぬが、論文家として、作家としての彼が、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com